

第3章

ことばと発達の 行動観察記録表 (試案)

1 「行動観察記録表」のねらいと構成

*なぜ、つくろうとしたか

これまでお話したように、私は健診で「要フォロー」となった子どもの、ことばと発達の相談を担当しています。そこでは、2歳前後から3歳過ぎの子どもと一緒に遊び、観察し、その中で、どういう支援が必要かの判断を求められます。また、そう判断した理由は何か、それはどういう根拠にもとづいているかを、他の部署のスタッフに伝えなければなりません。

試行錯誤で始まった「ことばの相談」でしたが、時を重ねるにつれ、「こういう点に注目すれば、その子の現在の問題点を把握できそうだ」というポイントのようなものが、自分の中で徐々に固まってきました。

さいわい、私はずっと、障害のある子どもたちとの生活を続けてきました。養護学校を振り出しに、リハビリテーション病院、市中病院、幼児の療育通園施設、障害児学級や保育園への巡回訪問、地域の福祉センター、などで仕事をしてきました。子どもの障害の様相もさまざまです。

しかし、場所は変わっても、「ことば」「コミュニケーション」をテーマとする相談・支援活動という内容はほとんど変わりませんでした。

むしろ、STとしての専門性から、ともすると狭くなりがちな私の視野を、子どもたちを通して接する他の職種の方たちやお母さん（養育者）たちに、ひろげてもらったと思っています。それはたとえば、

「ことばは生活を基礎とする全体発達の中で育つ」

「ことばだけにとらわれず、からだもこころも一緒に見てゆかなければならない」

「子どもの育ちには、お母さん（養育者）を支えることが不可欠」

「子どもの問題点だけにとらわれないで、健全な面にも注目する」

といったことです。

こうしたことを大切なよりどころとした上で、従来の「ことばの検査」や「発達検査」ではなく、子どものすこやかな育ちを支援するために、何が問題で、それに対してどんなことが必要なのか、が見えてくるもの。そして、健診や健診後のフォローの場で判断に迷ったときに基準となるもの、指導の手がかりになるもの。そういうものを求めてつくってみたのが、この「ことばと発達の行動観察記録表（試案）」です。

全く個人的な試案ですから、ひとりよがりの部分も多々あると思います。ST以外の職種の方たちにも実際に使ってみていただいて、不備な点を改善していければ、と思っています。よろしく願いいたします。

項目数が多すぎて、とても記録できないというご意見もいただきましたが、子どものことばと発達を正確に見るためには、このくらいの項目が頭に入っていることは必要と、私は思います。

最初は基本的な細かい見方を身につけること。そして、それを実際の子どもに当てはめて応用してゆく中で、次第に省略してゆけるのでは、と思っています。「勘」が身につくまでには、やはり習練が必要です。

*何のためのものか

◇この行動観察記録表は、子どもと遊びながら行動観察する場合に、どういう点に注目したらよいか、「ちょっと気になるんだけど……」という印象を実際に言語化して把握してみるためのものです。

◇気づいた点をチェックすることによって、子どもの「心配な側面」と「健

全な側面」との両方を見ることができると思います。

◇すべての項目をチェックする必要はありません。観察した行動、気になった項目だけでも結構です。ただしその場合、必ず「できていたこと」「問題なかったこと」についての観察記録も忘れないでください。

「健診用の色メガネ」をかけて子どもを見ると、つつい問題点や、できないことに目が向きがちです。これは厳に戒める必要があります。病気の発見や障害の発見だけをめざさないでください。

◇この行動観察記録表は「異常／正常」「障害／ノーマル」を振り分けるためのものではありません。お母さん（養育者）と子どもにとって、より良いかわりとはどんなものか、それをどう育ててゆけばよいか、の指針の入り口として使ってください。

◇この行動観察記録表はあくまで「観察記録」の視点をまとめたものであり、お母さんに直接質問して記録することを想定したものではありません。時間的制約などで、おうちでのようすを聞いて項目をうめる必要がある場合には、発問の仕方などを十分配慮し、お母さんに余計な心理的負担やマイナスイメージを与えないように注意してください。

*どのように構成されているか

行動観察記録表は、11のおおまかな「分野」から構成されています。

- (1) 行動的特徴
- (2) 外界への興味や注目
- (3) 感情・要求の表現、コミュニケーション行動
- (4) 遊び方
- (5) 指さし
- (6) 音や話しかけへの反応
- (7) ことばの理解
- (8) ことばや動作の表現
- (9) 発声
- (10) 発声発語器官と発音
- (11) お母さんのようす、子どもとのかかわり

* 観察記録の方法は、どのようにするか

◇ 行動観察記録表は、次のような構造になっています。

インデックスには (1)～(11) のおおまかな分野を示し、左側には観察項目の内容、真ん中には観察結果の記録、右側には観察する場合の判断の目安や実例などを記載しています。

◇ 観察結果は〈はい/いいえ〉〈できる/できない〉の2段階ではなく、5ないし4段階にしてあります。

〈はい/できる〉〈いいえ/できない〉の間には無限の段階が連続的に存在しており、発達途上の子どもの姿は、そのどちらかに単純に割り切ることができないと考えるからです。

たとえば、こんな場合です。

「最近歩き方がしっかりしてきたなあ、と思う。そういえば、視線もはっきりしてきたし、呼んだときの反応も格段に良くなっているし、手を使うことも増えたなど、変化が同時に起きてきた。そうこうしているうちに、発声が増え、指さしが出現し、ことばが言えるようになった」

発達的にはよく見られることですが、このような「実感」を、〈呼んだとき反応する/呼んでも反応しない〉の2つのどちらかに決めつけてしまうのは、子どもの実態を理解することにはつながりません。

このような一連の変化は、中枢神経系の機能の成熟の結果と推測されますが、その途上の状態を迷いつつ記録することで、子どもの現在の姿がいつそうよく見えてくるのではないかと思います。

◇ 〈おおむねできる〉とか〈時々できる〉などの差については、感覚的にとらえてくださって結構です。そのような「手ざわり」や「実感」は、きちんと数量化はできませんが、実はとても大切なことなのです。

◇ 記録欄は、右から〈問題あり〉〈要注意〉となっていて、左端が〈問題なし〉〈正常〉となっています。たとえば、

〈声を出して笑う〉では、多い・かなり・ふつう・少ない・全くない。

〈おとなのまねをする〉では、はい・時たま・わからない・いいえ。

◇ *印は、判断に迷う、中間の評定のときに、○をつけてください。

◇ 記録のない項目は、観察されていない項目です。次回、気をつけて観察するようにします。

◇ 次回まで待てず、記録表を急いでうめたいことがあります。やむを得ない場合で、お母さんとの信頼関係がしっかりできていることが確認できれば、「おうちでは、どうですか？」と聞いてみるでもいいでしょう。

その場合はくれぐれも「～ができない」とか「～しかししない」というマイナス評価の印象を与えないよう、表現を工夫してたずねるように注意してください。

◇ だいたい記録ができたなら、「まとめ用紙」に転記します。

◇ 印が右側に寄っている分野〈要注意・問題あり〉、左側に寄っている分野〈問題なし・正常〉が明らかになったでしょうか。

◇ どの部分が不足していて、どの部分が健全であるかが見えてきたら、はたらきかけの方法を考えます。「要フォロー」として遊びのグループなどに誘うか、頻度の少ない相談でつないでゆくか、の判断もします。

◇ はたらきかけの方法とその注意点については、第4章「発達障害について学ぶ」、第6章「ことばの遅れ——どうとらえ、どう支援するか」、第7章「ことばを育てる暮らし」、それから巻末の「子どものことばが遅いとき」などを参考にしてください。

次頁から、「ことばと発達の行動観察記録表（試案）」を紹介します。

ことばと発達の行動観察記録表 (試案)

氏名 (男 女) 年 月 日生

記入日 年 月 日 (歳 月)
年 月 日 (歳 月)

1) 行動的特徴					
①多動である	いいえ	*	どちらともいえない	やや	はい
②気持ちが急に変わる	いいえ	*	どちらともいえない	やや	はい
③行動にまとまりがない	いいえ	*	どちらともいえない	やや	はい
④部屋の中をうろうろする	いいえ	*	どちらともいえない	やや	はい
⑤変わった行動がある	いいえ	*	どちらともいえない	やや	はい
⑥小走りに歩く 爪先歩きをする	いいえ いいえ	* *	わからない わからない	* *	はい はい
⑦すぐ腹ばいになる 背中が曲がってグンニャリしている	いいえ	*	どちらともいえない	やや	はい
⑧オモチャなどの扱いが乱暴な感じがする	いいえ	*	どちらともいえない わからない	やや	はい
⑨初めてのところでもどんどん入っていく	いいえ	*	どちらともいえない	やや	はい
⑩おとなと手をつなぎたがらない	いいえ	*	どちらともいえない	やや	はい
⑪ミニカーなどのタイヤに注目する	いいえ	*	どちらともいえない	*	はい
⑫マークや文字などに注目する 小さなシールなどをはがしたがる	いいえ	*	どちらともいえない	*	はい

<p>目的がはっきりしていれば、動きが多くても「多動」とは言いません（ボールを追いかけてとか、窓に電車を見に行こうとして、など）。行動の目的がまわりの人に理解できないような動き方で、しかも、絶えず目まぐるしく動き回ることを「多動」と考えてください。</p>
<p>急に興味の対象が移るので、見ていて唐突な感じがします（ボールを取りに行くために立ち上がりかけたのかと思ったら、突然走り回り始めたり、すべり台に行きかけたと思ったら、急に向きを変えて部屋から出ようとする、など）。</p>
<p>積木を放り出すだけで積みない、操作玩具をガンガンたたきただけだったり、かごの中のボールを全部出してまき散らしたらそれでおしまい、など。ボール遊びにはつながらない。</p>
<p>おしっこしたいときに落ち着かなくなるのと似た、目的の不明確な落ち着きのない動き。</p>
<p>目の遊び：コンセントやおとなの洋服の水玉模様をジーッと見る／天井の明かりをちらっと見る／ミニカーをひっくり返してタイヤの回るように注目する／など。 触覚遊び：窓わくをペロペロなめる／じゅうたんにほっぺたをすりつける／など。 決まりきった行動（常同行動）：手をヒラヒラさせる／グルグル回る／絶えず手をたたいている／など。</p>
<p>かかとをつけてしっかり歩けないのは感覚統合障害のサインであることがあります。ヒラヒラ、チョロチョロ歩いている感じがしたら、要注意。詳しく観察して見てください（ゆるい坂を歩くときや、階段を登るときなどはどうですか？）。</p>
<p>姿勢を保つことがむずかしく、グニャッと腹ばいになったり、背中が曲がっていたりします。生活リズムの乱れのある子どもにも見られる行動です。</p>
<p>感覚統合がうまくできていないと、徐々に力を入れたり、ソッと難したりすることがむずかしく、オモチャのつまみをガチャガチャ回したり、オモチャをドン／と落とすように置いたり、物を投げるように渡したり、なんだか乱暴な感じがします。</p>
<p>探索意欲が旺盛な場合と、周囲の状況がよく理解できていない場合と、両方が考えられます。</p>
<p>束縛されるのがいやなだけでなく、触覚的に過敏なのかもしれません。</p>
<p>グルグル回るものが好き。ミニカーをそのものの用途として見られない。</p>
<p>全体の意味よりも細部に注目する、こだわりに似た行動です。幼い子どもにはよく見られますが、生活世界がひろがるにつれて消失してゆきます。いつまでも続く場合は注意深く観察を。</p>

2) 外界への興味や注目	
①他の人や他の子どもに注意を向ける	はい 気が向くと よくわからない ほとんどしない いいえ
②他の人の動作に注目する	はい 気が向くと よくわからない ほとんどしない いいえ
③他の人のすることをまねする どんなことをまねたか 具体的に書いてください ()	はい 気が向くと よくわからない ほとんどしない いいえ
④他の人のほたらきかけに応じる 具体的に書いてください ()	はい 時々 よくわからない ほとんどしない いいえ

3) 感情・要求の表現、コミュニケーション行動	
①表情	表情豊か * ふつう * 表情が変わらない
②からだの動きによる感情の表現	多い ふつう 少ない 全くない
③笑顔	多い ふつう 少ない 全くない
④声を出して笑う	多い ふつう 少ない 全くない
⑤ぶついたりして痛い泣く、ベソをかき お母さんになぐさめてもらいにくる	はい わからない 時々 全くない
⑥名前を呼ぶと反応する (振り向く、視線が合う、動きが止まる)	はい たいていいつも 気が向いたときだけ しない 全くない
⑦視線の合い方	しっかり合う 合う わからない 合いにくい 全く合わない 合うが弱い
⑧もののやりとり	する おおむねできる わからない うながされればする しない
⑨バイバイする 視線合わせて、手のひらを相手側に向けて	する 手がちよつと だけ動く 視線のみ 手のひらの向き が逆さま しない

他の人が部屋に入ったりするとそっちを見る/他の子どもが大きな声を出すとそちらに注目する/など。ひとりきりで遊び、他人を必要としないような場合は配慮が必要です。
他の子どもやおとながすることをジッと見て注目したり、そばに寄って行くことがありますか。
オツムテンテンのような「芸当」も模倣の始まりで、模倣はことばの基礎の力です。 (ボールをポンと転がして見せると、自分も転がす/ドンドンと足踏みして見せると、自分もやる/お母さんがお化粧していると、自分も顔をパタパタはたく/子ども番組の体操などを見ながらテレビの前でからだを揺らす、など)
おとなが遊びに誘うと一緒に遊ぼうとする/「もうお帰りの時間だよ」と話しかけると顔を見て応じる/など(素直に帰り支度をするか、まだ遊ぶとだだをこねるか、の反応は問わない)。「通じている」という感じが持てるかどうか。

オモチャのふたが開かないときとても困ったような顔をする/部屋の外で大きな音がすると不思議そうな顔をしておとなを見る/など。子どもの表情から子どもの気持ちが読み取りやすいですか。
すべり台をすべり終えてヤッターというように両手を挙げる/欲しいものに向かって手を伸ばしてせがむようにする/など。
笑顔や笑い声はが少ないのは神経系の問題であることもありますが、気持ちが開放されているかどうかとも大きな関係があります。楽しい雰囲気の中で、でんぐり返しや抱っこして走るなどのからだを使う大きな遊びをしてみて、笑顔や笑い声のようすを見てみましょう。
痛みの感覚が鈍い場合もあります。痛覚があっても表現できない場合もあります。泣くという「真の感情」も、安心して表現できるお母さんとの関係は大切です。
外界への注意の向け方の指標になります。聴力障害のために反応がない場合、発達的な問題のために反応がない場合、個人差の範囲である場合など、さまざまな要因が考えられます。
視線の合い方は発達の大きな手がかりになります。自分から要求のあるときはしっかり視線を合わせてくるのに、外からはほたらきかけには応じにくいという子どもが増えてきています。
もののやりとりは会話の基礎です。ボールやおもちゃなどをおとなが「はい」と渡そうとすると、受け取ることができますか。「ちょうだい」と言うと、転がしてくれたり渡してくれますか。「ちょうだい」と言うと「イヤッ」というふうにはそっぽを向くのは「ちょうだい」の意味がわかっていて「NO」の返事をしているのだと考えられます。
お母さんに抱かれて手が下の方でムズムズと動かせ/「バイバイね」と顔をのぞきこまれて下を向いてしまう/など、いろんなバイバイがあります。手のひらの向きが逆なのは要注意です。

4) 遊び方					
①おもちゃでの遊び方	自分で工夫して遊ぶ	おとなが介入すると遊ぶ	パターン化した遊び	感覚遊びのみ	遊べない
②おもちゃや物を変った使い方で扱う	いいえ	*	どちらともいえない	*	はい
③おとなとかかわりながら遊べる	はい	時々	どちらともいえない	介入を好まず一人で遊ぶ	
④次々といろいろなおもちゃに興味が移る	いいえ	*	どちらともいえない	やや	はい
⑤見立て遊びや「ふり」をする	はい	*	わからない		いいえ

5) 指さし					
①他の人が指さすと、その方を見る	はい	気が向くと	どちらともいえない	いいえ	
②指よりも手全体でさすことが多い	いつも指でさす	指さしと手さし	手でさす	ささない	
③指さし(手さし)はするが、何をさしているか、はっきりしない	いいえ		どちらともいえない	はい	
④指さしをする	はい		どちらともいえない	いいえ	
⑤指さしをしながら、おとなの顔を見る	はい	たまに	どちらともいえない	いいえ	
⑥クレーン現象がある	ない	指さし+クレーン現象	クレーン現象のみ		

遊びは知的発達のようなすを反映します。おもちゃを使ってひとりで遊べるか。おとなと一緒に遊んであげれば遊べるか。穴に入れたり出したり、ただだけのパターン化した遊びか。指しゃぶりや積木の打ち合わせなどの自己刺激的な感覚遊びか。
パズルや積木：「はめる」または「積む」ために使わず、両手に持って打ち合わせるのみ。 ボール：転がしたりバットで打ったりせずに、1列に並べる。クルクル回す。 ミニカー：押して遊ばないで、1列に並べるだけ。裏返しにしてタイヤをクルクル回して、ジーッと見る。 絵本：ペラペラめくるだけで絵を見ない、ストーリーを聞こうとしない。
おとなが「こうしたら」とか「ここに入れるのよ」と言うと、それに応じて一緒に遊べますか。おとなの手を払いのけ、おもちゃを部屋のすみっこに持って行って遊ぶような行動が見られますか。一般の子どもにも見られますが、一応チェックしておきましょう。
一定時間遊んで満足したから次のものに移るというのではなく、せかせかといろいろなものに注意が移り、じっくり遊べません。発達の問題だけでなく、性格的なことも関係します。
積木を飛行機や自動車に見立てて「ブーン」「ゴッコー」と動かす/バットを掃除機に見立ててじゅうたんのう上を押して歩く/歩けないふりや寝たふり、泣きまね/など。

「指さす」という動作の意味を理解しているかどうか。おとなが何かを指さして教えると、指さす方を見ますか。指そのものを見たり、全く反応しないなら、要観察。
腕や手で大まかな方向を示し、それに指が加わったものが「指さし」です。
大まかな方向はさすが、「これ」とか「あれ」と特定する視線の向きははっきりせず、指さしている持続時間が短いため、相手に伝わらない。
指さしは言語の前の準備。いくつかの種類に分けて考えられます。 ・要求の指さし：行きたい方向(アッチ)や欲しい物(アレ)をはっきり示す指さし。 ・叙述の指さし：「アッ、電車」などのように、おとなに何かを知らせるための指さし。 ・応答の指さし：「おめでとう!」「リンゴはどこ?」などの問いに答える指さし。
指さしは相手に伝えるためのもの。相手の顔を見るのが大切。
してほしいこと、取ってほしい物があるとき、近くにいる人の手を取ってやらせようとするを「クレーン現象」と言います。正常発達の子どものにも見られないわけではありませんが、いつまでも指さしにつながらない場合は、発達障害の心配があります。

6) 音や話しかけへの反応				
①音への反応	音のした方を振り向く	動作を止めたりアレッという顔になる	はっきりしない	反応しない
②大きめの声で名前を呼んだり話しかけたりすると	反応する	時により反応する	よくわからない	反応しない
③後ろから話しかけても反応する	はい	時により反応する	よくわからない	いいえ
④チャイムや電話、飛行機の音に	気づく	時により反応する	よくわからない	反応しない
⑤おとなからのコンニチハに対して	答える	見るが照れたようにもじもじする	よくわからない	見ていない 反応しない
⑥バイバイする（視線を合わせ、手のひらを相手側に向けて）	する	手がちよつとだけ動く	視線のみ	手のひらの向きがさかさま しない

7) ことばの理解				
①手がかりのある簡単な指示がわかる	はい	だいたいのはわかる	はっきりしない	限られたことだけ（気がむけば） いいえ
②ことばだけでの指示がわかる	はい	おおむねわかる	はっきりしない	ジェスチャーなど加えるとわかる いいえ
③文章での話しかけがわかる	はい		話題の中心の単語を強調したり、くりかえして言えばわかる	いいえ
④身近な物の名前を理解している	はい	物により	はっきりしない よくわからない	いいえ
⑤絵本や写真でも理解できる	はい	おおむねわかる	わかるものとわからないものがある	興味を持たない いいえ
⑥日常的なことばを理解し、動作で表現する（あいさつ、など）	はい	いくつかのものなら	はっきりしない よくわからない	しない

音が聞こえると、大なり小なり行動に変化が出るものです。発達に問題がある場合や外界への興味が薄い場合は、その反応が端からはわかりにくいので継続した観察が必要です。
遊ぶのをやめて話しかけた人の方を見る／話しかけた人の方からだの向きを変える／抱っこされているときなら、動きを止めてからだを固くする／など。
前からの話しかけと後ろからの話しかけで反応に差があるのは聴力障害の場合があります。
外界への興味が薄いと、聞こえていても反応しない場合も多いものです。
おとなの側が、子どもの視線をとらえるように顔をのぞきこんで「こんにちは」とか「おはよう」と声かけしてみます。顔をかくしたり、お母さんをたたいたりするのも反応の一種です。
前にも出てきています。コンニチハやバイバイは場面の切り換えであり、からだの動きの上でも、気持ちの動きの上でも変化がわかりやすい状況です。この場面での観察は重要。

ゴミを渡しながら「ゴミポイしてきて」、玄関で「クツぬごうね」など、その場の状況や手がかりになるものがあれば「わかっている」という場合。
日常生活では、ことば以外の手がかりが意外に多いもの。子どもの目をまっすぐ見ながら「ボールちょうだい」と言うと、ボールの方を見たり、取ってくれたりしますか。
身ぶりや指さしを使わず、「ことばだけ」ではたらきかけのようすを観察します。「ボール、ママにあげてね」ではわからないけど「ボール、ボール、ママにね」ならわかるか。
「歯ブラシ持ってきて」とか「タオル取って」といった話しかけに応じる。実際に持ってこなくても、その方を見たり、指さして「アーアー」と言ったりすれば、理解していると考えられます。
絵本で「アンパンマンは？」とたずねたり、写真で「パパは？」と聞くと、指さして答える。指さしなくても、その絵をジッと見たりするのも、反応の一種と考えられます。
「オイシオイシ」とことばだけで言っていると、ほっぺたに手を持ってゆく／「コンニチハ」と言うと頭を下げる／「バイバイしようね」で手を振る／など。

8) ことばや動作の表現				
①してほしいことや欲しいモノがあるとき、声を出す	はい	たまに	ほとんど出さない	全く出さない
②場面に合った、感情のこもった声を出す	はい	なんともいえない	ほとんど出さない	全く出さない
③動作で表現する	はい	なんともいえない	ほとんどない	全くない
④意味のあることばを言う	はい		気が向くと	いいえ
⑤? 語文以上の文章を言う	はい		わからない	言わない
⑥おとなの言うことをまねる (感情やイントネーションも含めて)	はい	時たま	どちらともいえない わからない	いいえ
⑦機械的にまねている感じがする (オウム返し)	いいえ		どちらともいえない わからない	時々 はい
⑧イントネーションが平板で、語尾が上がる話し方をする	いいえ		どちらともいえない わからない	時々 はい
⑨場面に合ったことを自分から言う	はい		よくわからない	いいえ
⑩コマースなどの決まりきったことしか言わない	いいえ		よくわからない	はい
⑪「取って」を「トル」と言う	いいえ		よくわからない	時々 はい

9) 発声				
①よく声を出している	はい	よくわからない	まだことばを言わない	いいえ
②おっかっけこ、タカイタカイ、くすぐりっこなどをすると声を立てて笑う	はい	たまに	なんともいえない ほとんど声は出さない	全く出さない
③レロレロとかガガガガなど決まりきった意味のない音を出している	いいえ		なんともいえない	時々 はい
④さも何か言っているような調子声を出す	はい	なんともいえない	ほとんどない	全くない
⑤甲高い声、おしつぶしたような声、うなり声	いいえ		なんともいえない	時々 はい

棚の上のオモチャに手を伸ばして、せがむような調子で「アーアー」/部屋から帰りにたくなくて、くずり声で「アー」/など。音声をコミュニケーション手段に使い始めている証拠です。
何かを落として「アーア」/ジュースを飲み干して、おいしそうに「アー」/など。おとなが思わず応えてやりたくなるような語調で話すことで、おとなからはたらきかけを誘っています。
帽子を頭を持ってゆく/ぶどうの絵を見てプップツと種を吐き出すまねをする/など。
ことばの一部であってもよい。リンゴを「ゴ」、帽子を「ボ」など。お母さんは「ことば」とみなしていないが、「ヨイショ」「ポーン」などのかけ声や、あいさつの一部（こんにちほのワ、行ってらっしゃいのチャイなど）は言えていることが多い。
「ママ、コッチ」「ワンワン、イタ」など? つ以上のことばをつなげて言う。
「リンゴあった」と言う、「あったノ」と言う。おとなが「ごちそうさま」と言う、一緒に「(ムニヤムニヤ) マ」と言う。ことばの一部だけをまねる場合も含めます。
「オウム返し」というのは、話し手の言ったことをそのまままねることをさします。感情のこもらない平板な抑揚で、機械的な感じを受けます。
抑揚がなく機械的な印象があったり、語尾が上がる話し方をしている場合は、発達上の問題を併せ持つ場合が多いので、ひき続きのかかわりが必要です。
犬を見つけて「あ、ワンワン」などと自分から言いますか。
言えることばの数が多くても、コミュニケーションに使えていないことがあります。
「開けて」を「アケルノ」、「取って」を「トルノ」と一本調子に言う場合は要観察です。

遊んでいるときなどに声をたくさん出しているほうが、意味のあることばにつながる可能性が大きいのです。発声の少ない子には声を出すゆさぶり遊びをしましょう。
からだの大きな動きをとまなう遊びは発声をうながします。笑い声は話し声とイコールではありませんが、笑いによる発声は大いに勤めたいものです。
一般的な喃語には、いろいろな音の種類が含まれています。決まりきった音の種類しか出さず、聞いた印象も「固い」感じがする場合は、ひき続きのかかわりが必要です。
人は、語調で多くのことを伝えていきます。感情のこもった声はことばへの道です。
③と同じように、ちょっと心配なことがあります。

10) 発声発語器官と発音					
①よだれ	出ない	なんともいえない	時々出る	多い	
②噛むこと(食事)	問題ない	噛めない ものもある	丸呑みしたり口 から出したりする	いつまでも口の 中に残っている	噛めない
③ストローで	吸える		よくわからない	吸えない	
④ラッパを	吹ける	興味が無い	よくわからない	吹けない	
⑤口のまわりをなめる(できたら ○)	できる(上・下・左・右・クルリと)			できない	
⑥舌を出したとき、舌の先がハート型に	くぼまない		よくわからない	くぼむ	
⑦鼻に抜けるようなフガフガした声	そう思わない		わからない	そう思う	
⑧鼻のつまったような声	そう思わない		わからない	そう思う	
⑨発音の明瞭さ	誰が聞いても わかる	時々わからない ことがある	半分くらい わかる	慣れた人でない とわからない	慣れた人でも ほとんどわからない

11) お母さんのようす、子どもとのかかわり				
①部屋への入退室時や遊びの中で子どもを見ているか	よく見ている	どちらともいえない	見ることが少ない	ほとんど見ていない
②子どもからはたらきかけに対して	よく応じる	どちらともいえない	応じ方が少ない	ほとんど応じない
③はたらきかけの主導権	子どもからはたらき かけで始まること多い	子どもからの開始と お母さんからの開始と半々		お母さんからはたらき かけが多い
④お母さんからはたらきかけの距離と内容	ことばと身ぶり、表情など を使ってはたらきかける	通じないと近くに 行って話しかける		遠くからことばだけ での話しかけが多い
⑤お母さんからのことばかけのようす	子どものようすに 合わせたことばかけ	特にどうとも いえない		一方的な話しかけ、命令 口調や教え込みが多い
⑥困ったことがあったり痛かったりすると、お母さんを求めますか	はい	どちらともいえない わからない		いいえ
⑦うれしいことがあると、お母さんの方を見ますか	はい	どちらともいえない		いいえ
⑧子どもを見るお母さんの表情	笑顔も出てリラックス している	どちらともいえない わからない		かたい感じ

よだれの有無は、口の周辺の動きや筋肉の使い方の発達と関係があります。
噛むはたらきは、ことばを話す(発音する)はたらきと関係が深いので、しっかり噛むようにはたらきかけることは大切です。ただし個人差もかなり大きいように思います。
話しことばの基本となる動作のひとつです。
吹くことは、息が鼻もれしないようにすることで、発音の基礎となります。
舌の細かい動きは、発音に影響します。
構音(発音)に影響するような舌小帯短縮の有無を調べる。
口蓋裂などに類する口腔内の問題がある場合があります。
同上。単なる鼻づまりの場合もあり、1度での判断は危険です。
発音は年齢とともにだんだんに改善してゆくものですが、聴覚的印象も大切です。

子どもに目を向けるのは、無意識に子どもの気持ちを支えていることを意味します。特に子どもが不安定になりやすい場面の切り換え時(入退室時など)は注目です。
子どもがボールを受け取って得意そうにお母さんの方を見たら「取れたね」と言う/すべり台をすべり終えて両手を上げたら「ヤッター」と言う。反応が多いほうが子どもには励みになります。
ことばやコミュニケーションは相互作用ですから、一方的なかかわりの不備を責めることはできません。ただし、かかわりの上手でない親子は確かにいます。すれ違いを直してあげましょう。
「ことばをかける」といっても、ことばだけの話しかけは、子どもによってはあまり有効でないこともあります。むしろ、からだを使った全体的なかかわりを勧めましょう。
コミュニケーションの基礎は「好きな人、わかってくれる人」の存在。一方的なことばかけがコミュニケーション意欲をそいでいることも多く見られます。
お母さんへの愛着は、ことばの機能の基礎ともいえるものです。痛み自体をほとんど感じられない子どももいますし、「人に頼る」気持ちが育ちきれない子どももいます。
愛着関係の成立。
子どもとの関係は表情によく表われます。心配があったり、育てにくい子どもだと、お母さんの表情が固くなるのも当然です。また、慣れない場所での緊張もあります。継続しての観察を。

計	12	12
(1)	1	* 3 4 5
(2)	1	* 3 4 5
(3)	1	* 3 4 5
(4)	1	* 3 4 5
(5)	1	* 3 4 5
(6)	1	* 3 * 5
(7)	1	* 3 4 5
(8)	1	* 3 4 5
(9)	1	* 3 4 5
(10)	1	* 3 4 5
(11)	1	* 3 * 5
(12)	1	* 3 * 5

計	4	4
(1)	1	2 3 4 5
(2)	1	2 3 4 5
(3)	1	2 3 4 5
(4)	1	2 3 4 5

計	9	9
(1)	1	* 3 * 5
(2)	1	2 3 4
(3)	1	2 3 4
(4)	1	2 3 4
(5)	1	2 3 4
(6)	1	2 3 4 5
(7)	1	2 3 4 5
(8)	1	2 3 4 5
(9)	1	2 3 4 5

計	5	5
(1)	1	2 3 4 5
(2)	1	* 3 * 5
(3)	1	2 3 4
(4)	1	* 3 4 5
(5)	1	* 3 5

計	6	6
(1)	1	2 3 4
(2)	1	3 4 5
(3)	1	3 5
(4)	1	3 5
(5)	1	2 3 4
(6)	1	2 3

計	6	6
(1)	1	2 3 4
(2)	1	2 3 4
(3)	1	2 3 4
(4)	1	2 3 4
(5)	1	2 3 4 5
(6)	1	2 3 4 5

計	6	6
(1)	1	2 3 4 5
(2)	1	2 3 4 5
(3)	1	2 3
(4)	1	2 3 4
(5)	1	2 3 4 5
(6)	1	2 3 4

計	11	11
(1)	1	2 3 4
(2)	1	2 3 4
(3)	1	2 3 4
(4)	1	2 3
(5)	1	2 3
(6)	1	2 3 4
(7)	1	2 3 4
(8)	1	2 3 4
(9)	1	2 3 4
(10)	1	2 3
(11)	1	2 3 4

計	5	5
(1)	1	2 3 4 5
(2)	1	2 3 4 5
(3)	1	2 3 4
(4)	1	2 3 4
(5)	1	2 3 4

計	9	9
(1)	1	2 3 4
(2)	1	2 3 4 5
(3)	1	2 3
(4)	1	2 3 4
(5)	1	上下左右 (方位) 2
(6)	1	2 3
(7)	1	2 3
(8)	1	2 3
(9)	1	2 3 4 5

計	8	8
(1)	1	2 3 4
(2)	1	2 3 4
(3)	1	2 3
(4)	1	2 3
(5)	1	2 3 4 5
(6)	1	2 3 4

まとめ (経過観察の必要な項目の数)

1) 行動的特徴	12
2) 外界への興味、注目	4
3) 感情表現	9
4) 遊び方	5
5) 指さし	6
6) 音への反応	6
7) ことばの理解	5
8) ことばや動作の表現	11
9) 発声	5
10) 発声発語器官	9
11) お母さんのかかわり	8

2 11の「分野」について

(1) 行動的特徴

◇「不思議な行動」や「理解しがたい行動」をとる子どもがいます。あらわれ方はさまざまですが、いずれも中枢神経での感覚処理の回路が混線していたり、未熟であったり、調節機構がうまく作動しないために起こると考えられます。

◇「根っこはひとつ」ですので、個々の「理解しがたい行動」に惑わされることなく、生活をしっかりつくりあげてゆく、生活リズムを整える、からだを使った遊びに十分つき合う、という基本方針で対処してください。たとえば「目が合わない」という細部に注目し、「目を合わせるように」と、その部分だけを直そうとしても効果は上がりません。

◇具体的には、第7章「ことばを育てる暮らし」や、その中の「感覚統合を進める遊び」を参考にしてください。

◇「幼い」ということは神経系の感覚処理機能の未熟を意味します。小さいうちは多くの子どもが「不思議な行動」や「こだわり」に近いくせをもっています。「理解できない行動」があるからといって、全部が心配、全部が問題なわけではありません。生活世界がひろがり、神経機能がレベルアップすると、自然に「不思議な行動」は減ってゆくものです。あまり心配せずに「ようすを見る」(時間経過による変化を追う)のも大切なことです。

(2) 外界への興味や注目

◇「まね」は「まねぶ」になり「学ぶ」ということばの語源となりました。人間はことばを「まね」すなわち「模倣」によって覚えます。フランスに生まれるとフランス語を、日本に生まれると日本語を話すようになるのは、そのためです。

◇そばにいる人に注目し、まねようとするのが、ことばの獲得にとって、

きわめて大切です。

◇ことばの模倣の前に、動作の模倣が出てきます。おとながボールをかごに投げ入れるのを見て、自分も投げる、などです。

◇「オツムテンテン」「チョチチョチ アワワ カイグリカイグリ トットの目」のような「芸当」は、くり返しによってできるようになります。

◇ゴルフクラブの柄を持って畳の上を押して歩いているのが、実は、掃除機をかけているお母さんの姿のまねだったり、いろいろ可愛らしい場面が見られると思います。

◇「(1)行動的特徴」や「(4)遊び方」において心配な点がある子どもたちの場合、「まね」というよりもパターン化した行動としてインプットしてしまうことがあります。「まね」と「パターン化した行動」の違いは、そこに感情や視線の交流があるかどうかという点です。

◇一見「まね」のように見えても、自分の世界の中だけで「決まりきった行動をする」ことは「場面を理解し、その人のすることに注目し、それを再現する」(まねる)こととは似て非なるものです。

(3) 感情・要求の表現、コミュニケーション行動

◇前の「(2)外界への興味や注目」が、どちらかというところ、そこにいる人の動きや動作への注目を見ていたのに対し、ここでは、人そのものへの関心や気持ちの交流、気持ちの表現に焦点を当てています。

◇「⑤ぶついたりして痛い泣く、べそをかく。お母さんになぐさめてもらいにくる」は、母子の愛着関係を中心とした情緒発達の項目としてとらえることもできます。しかし、「だから、お母さん、よく子どもさんを可愛がってあげなさい」という紋切り型の「指導」につながることを避けるため、あえて、こういう表現をとりました。

「痛いはずなのに、お母さんを求めないのは、お母さんの受け入れが悪いせいでは？」と情緒的・心理的に考えるのではなく、「痛みの感じ方が鈍いから、お母さんを求めないですむのではないかと、神経学的・生理学的な理解の仕方を見てほしいのです。

◇「べそをかく」という泣き方は、情緒表現が分化してきたことをあらわ

す大切な行動です。

◇「⑥名前を呼ぶと反応する」は「はい」と返事をすることや、振り向くことだけではありません。声は出さなくても、動きが止まる(背中で返事)とか、チラッと目を合わせてニコッとするとか、持っているオモチャを投げつけるとか、いろいろな返事の仕方があります。

◇順番が飛びますが、「⑨バイバイする」も同様で、いろいろな表現があります。「正しい形」ととらわれないで、その子なりのバイバイの仕方を読み取れるようしてください。

バイバイの手のひらの向きには必ず注目してください。手のひらを自分の方に向けて振るのは、「(1)行動的特徴」と絡んでくる問題です。(自分—相手)の関係が確立していないために起こると考えられ、自閉症の子どもに多く見られる行動です。発達の一時的な問題として消えてゆくこともありますので、このことだけを取り上げて必要以上に心配することはありませんが、人と楽しく遊ぶ機会をひろげつつ、注意深くフォローする必要があります。

なお、一般の子どもでは、バイバイの手のひらの向きが逆さまになる子はほとんどいない、と言っていいと思います。

◇視線についても同様です。一般の子どもの場合は、視線が合いにくいということはあまり考えられません。「⑦視線の合い方」は、発達上の問題の大きな手がかりです。「目は口ほどにものを言い」のことわざもあるように、人は感情交流の多くを目を通じて行ないます。

目が合わないことを心理面からとらえる考え方もありますが、視線の動きを(前庭—動眼系)の問題ととらえる「感覚統合理論」は非常に説得力があります。その証拠に、抱っこしてグルグル回したり、ユラユラゆすぶったり、乱暴な遊びをたくさんした後は、よく目が合うようになります。「子どもの好きな乱暴な遊びをたくさんしてあげる」ことが、関係改善の糸口です。

アメリカの作業療法士、エアーズによって体系化された感覚統合理論には、学ぶべきものがたくさんあります。第7章「ことばを育てる暮らし」でふれてありますので、参考にしてください。

(4) 遊び方

◇遊び方を通じていろいろな点を観察します。

◇「①オモチャでの遊び方」では知的な発達のような様子を見ます。遊び方を展開していけるのは、まとまった思考が可能になってきている証拠です。発語が少なくても、内部に「ことば」がたくさん蓄えられていると考えてよいでしょう。

パターン化した遊びとは、ミニチュア野菜をお鍋に詰め込めるだけ詰め込み、一杯になるとあけてまた詰め込む、などを延々とくり返し、次への発展が見られないような場合です。それを遊びとして楽しんでいるのかもしれませんが、少し積極的に介入して、新しい遊びに誘ってみましょう。たとえば、ガス台を持ち出して「グツグツ煮よう」と誘ってみるなど。

たたく、振る、なめる、などの感覚刺激だけの遊びは、発達初期の行動であり、1歳6か月以降に出てくる行動としては幼いといえます。また、こういう感覚遊びは一種のこだわり行動であることもあります。

◇「②オモチャや物を変った使い方で扱う」。たとえば、バットは本来「ボールを打つための道具」ですし、ミニカーは「自動車のかわりにして、ブプーと走っているところを想像しながら遊ぶ」オモチャです。ところが、バットもミニカーもただただ1列に並べるだけしかしない子どもがいます。

外界にあるものの「意味」をとらえることができず、その形や色や模様といった本質的でない要素に注意が向いてしまいます。並べる、クルクル回す、トントンたたくなど、決まりきった用途にしか使いません。

このような遊び方が見られる場合は、からだを媒介とする遊びではたらきかけつつ、注意深くフォローする必要があります。「(1)行動的特徴」の分野と共通する神経系の問題を持っている可能性があります。

◇「③おとなとかかわりながら遊べる」。一緒にかかわって遊べるかどうかは、対人関係のひろがり、外界への興味と関連して、大事なポイントです。

気をつけるべきは、中には、性格的にマイペースで、自分だけで遊ぶのが好きな子どももいる、ということです。そういう子は「かかわれない」のではなく「かかわるのが好きではない」のです。成長につれてだんだんに「(好きではないけれど) かかわりを拒否はしない」というふうに変化していきます。この場合は、あまり問題視しないで、長い目で見守ることが大切です。

人の介入を好まず、ひとり遊びが多く、しかも他の項目でもいろいろと気になる行動が多いということであれば、注意深くフォローしたほうがいいでしょう。

◇「④次々といろいろなオモチャに興味が移る」。興味が移るのは、落ち着きのなさのあらわれである場合もあれば、単に好奇心旺盛であれもこれもやってみたい場合、また情緒的に不安定で集中して遊べない場合など、いろいろな要因が考えられます。他のオモチャ、他の場面でのようすを併せて観察しておきましょう。

たとえば、お母さんと2人になると落ち着いて絵本を読んでもらったりできるのであれば、知的な遅れとか多動といったことは考えなくてもいいかもしれません。

◇「⑤見立て遊びやふりをする」。たとえば、バットはボールを打つための棒であって、ゴミを吸い込むための棒ではありません。でも子どもは、ここにある棒(バット)に、ここにはない掃除機の棒(パイプ)のイメージを託して、押して歩いたりして遊びます。それが「見立て」です。それは、「アメ」ということばを聞いて、今ここにアメがなくても、あの甘いアメを思い起こすはたらき、つまり、「アメということば」(音のつながり)に、「アメのイメージ」を託すという、ことばのはたらきに非常に近いものです。そういう意味で、見立て遊びや「ふり」は、知的な発達やことばの発達を推測する上で重要なポイントです。

(5) 指さし

◇指さしは、わかっているようでわかっていない部分の多い行動です。指さしはふつう生後9か月ころからお誕生過ぎくらいまでの間に、できる

ようになります。誰も「指さしはこうやってやるのよ」と教えないのに、です。そして、指さしの出現と前後して、ことばを言えるようになります。「指さしはことばの前ぶれとして重要な意味を持つ」ということは、はっきりいえます。

◇「犬」ということばは「毛皮でおおわれて、シッポがあって、ワン!と鳴く動物」を表わす「記号」です。たとえ目の前に犬がいなくても、「犬」ということばがあれば、言った人と言われた人の脳の中で、犬のイメージを共有することができます。「テーマの共有」は「ことば」の大きなはたらきです。

目の前にいる犬を「指さす」ことは、指さす人と指さしを見る人が、「犬」を脳の中で共有する「テーマの共有」です。このことが、ことばの前段階としての大きな意味を持つのです。

◇指さしはその用途によっていくつかの種類に分けられます。

- ・ 定位の指さし……「あれっ!」と見つけたことを教える
- ・ 要求の指さし……「あっち」へ行きたいときに、そちらをさす
- ・ 叙述の指さし……「あそこに犬がいる」と教える
- ・ 応答の指さし……「おめでとう?」と聞かれて、目をさす

◇「①他の人が指さすとその方を見る」。中には、おとなが飛行機などを指さすと、指がさしている方向をではなく、指そのものを見てしまう子どもがいます。これは心配。外界の意味理解についての障害があるかもしれないからです。

◇「③指さし(手さし)はするが、何をさしているか、はっきりしない」「④指さしをする」。指1本だけではっきり指さしができるようになる前に、手全体でさすような時期、何かをさしてはいるようなのだけれど、はっきりはわからない、というようなことが見られます。手指機能の分化が進むと、きれいな指さしができるようになります。

◇「⑤指さしをしながら、おとなの顔を見る」。要求を伝えたり、あっちへ行きたいと伝える指さしのときには、相手の顔を見ながら訴えます。

◇⑥の「クレーン現象」とは、してほしいことがあるときに、相手の顔を見たり、声で要求したりするかわりに、相手の手をじかに持って目的物

を取らせようとすることです。「相手の手をロボットのように使う」と表現されることもあります。

クレーン現象は「目が合わない(合いにくい)」「理解できない行動が多い」「バイバイの手ひらの向きが逆さま」と並んで、発達上に問題を持っている可能性が高いことを暗示する行動です。主として自閉症児に見られますが、一般の子どもの場合にも、8か月~12か月ころに一過性に見られることが観察されており、ことばが出てくるころには見られなくなります。今後、詳しい分析が必要と思われる。

(6) 音や話しかけへの反応

◇耳が聞こえていることが、ことば獲得の重要な条件です。しかし、耳が聞こえていても外界への興味の持ち方が偏っていると、反応してくれません。見きわめがむずかしいところです。

◇「①音への反応」。音のした方をすばやく振り向くのは正常です。振り向きに時間がかかったり、反応がはっきりしない場合は、次のような要因が考えられます。

- ・ 聴力障害がある
- ・ 知的な遅れがある
- ・ 外界への興味が薄い
- ・ 遊びに夢中になっていた

1度で決めないで、再度試してみましょう。

◇「②大きめの声で名前を呼んだり話しかけたりすると」「③後ろから話しかけても反応する」「④チャイムや電話、飛行機の音に」では、声による話しかけや音への反応を見ます。

反応の内容としては、顔を見たり、返事をしたり、というわかりやすいものもあれば、顔をそむけるとか、からだを固くするとか、持っているオモチャを投げつけるといった、わかりにくいものもあります。呼ばれる前と後とで明らかに行動上の変化があれば、聞こえていると考えていいでしょう。全く聞こえない場合は、大声で呼びかけても、知らん顔で遊び続けるものです。

◇外界への興味の薄さから音への反応が鈍いと考えられる場合は、お母さんに、こんなふうになぞねてみてください。

「お気に入りのコマースシャルが始まると、後ろを向いても、隣の部屋で遊んでも、飛んできますか？」

「エビせんやポテトチップの袋を開ける音がすると、耳ざとく聞きつけて、やってきますか？」

興味のある音に対しては、小さい音であっても敏感に反応するのであれば、耳は聞こえていると思われれます。

◇「⑤おとなからのコンニチハに対して」「⑥バイバイする」。対面のあいさつやさよならは、場面の切り替えであり、子どもの行動特徴やお母さんとの関係が象徴的にあらわれます。入室時・退室時のようすは、よく観察してください。

(7) ことばの理解

◇ことばの理解を見ている。おとなは、小さい子に話しかけると、ついつい身振りをつけたり、オーバーな表情による手がかりを与えることが多いので、「ことばだけ」を意識してはたらきかけをしてみます。その上で、答えてくれるかどうか、を見ます。

(8) ことばや動作の表現

◇「⑦機械的にまねている感じがする」「⑧イントネーションが平板で、語尾が上がる話し方をする」「⑩コマースシャルなど決まりきったことしか言わない」。いずれも広汎性発達障害（一般的には「自閉的傾向」といわれることが多い。第4章参照）の子どもに見られがちな状態像です。

◇「⑪『取って』を『トル』と言う」。「自分」と「相手」の関係の理解ができにくいために起こる混乱と考えられます。上と同じように広汎性発達障害（自閉的傾向）の子どもに多く見られます。

(9) 発声

◇声がたくさん出ている子どもは「ことば」につながりやすいものです。

もちろん、むっつり黙っていても、しゃべり始めるときはしゃべる、という子どももいますけれど。特に「④さも何か言っているような調子の声を出す」は、意味のあることばにつながる可能性大です。

◇「③レロレロとかギガギガなど決まりきった意味のない音を出している」「⑤甲高い声、おしつぶしたような声、うなり声」。発声発語器官の緊張を思わせるような声の出し方、決まりきった音の種類しか出さないのは広汎性発達障害（自閉的傾向）の子どもに多く見られます。

有意味語につながる発声は余分な力の入らないリラックスした声であり、聞いていても、いかにも何か伝えようとしている、という印象があります。また、音の種類も、平仮名で書き表わせるほど整ってはいないものの、いろいろな音の要素を含んだあいまいな音であることが多いものです。

一般の子どもでは、発声がレロレロとかギガギガというような音だけに限られることは非常にまれ、と考えていいと思います。

(10) 発声発語器官と発音

◇第5章「ことばと聞こえのしくみとその障害」で説明してあります。発音（構音）するために必要な鼻咽腔閉鎖機能や舌の動きを見ておきます。

(11) お母さんのようす、子どもとのかかわり

◇ことばの成立には「好きな人の存在」「その人のすることをまねしたい気持ち」が必要です。そういう意味で、一番多くの時間かかわっている、お母さんと子どもが良い関係を保つことは大切です。

子どもとのかかわり方が上手なお母さんもいれば、あまり上手でないお母さんもいます。お母さんのかかわり方は、子どもの行動特徴との組み合わせに関係し、どの程度の援助が必要かはケースバイケースです。

◇ここでは、お母さんと子どもの愛着関係を中心に、どんな行動をしているかを、ざっと見えています。

◇相互の関係がうまくいってないようと思われるときには、遊びのグループなど、第三者の目と手を借りられる場所に、親子を連れ出す方が必

要になります。

ことばの問題は、有意味語の有無や、発声の多少など、音声にあらわれる部分にとらわれてしまいがちです。

しかし、これまで見てきたように、ことばは、からだやこころのありようまでを含めた全体的な関係の中でとらえてゆく必要があります。そして、まわりの人のかかわり方も、子どものことばが伸びてゆくための重要な要因となります。

行動観察記録表によって明らかになった子どもの発達的な意味での「弱さ」を、どうかかわりによって改善してゆくかについては、この後の章、特に7章「ことばを育てる暮らし」をご参照ください。

*この行動観察記録表の作成後に、手に入れた資料があります。

「従来の乳幼児健診では発見しにくかった軽度の精神発達遅滞や自閉性障害、注意欠陥多動障害などを早期（1歳6か月）に発見し、地域での早期療育に結びつけることで、障害の予防や軽減をめざし」てつくられたという『乳幼児精神発達健診マニュアル』です。

ことばの発達とコミュニケーション行動を中心に見ていこうとする、私の「ことばと発達の行動観察記録表（試案）」とは、出てきた背景が違いますが、健診の現場には参考になる点が多々あると思いますので、ご紹介します。

・問い合わせ先長野県精神保健福祉センター

〒380-0922 長野市若里1570-1 TEL 026-227-1810 FAX 026-227-1170

◆感覚統合について学ぶ本

『感覚統合Q&A』佐藤剛（協同医書）

『みんなの感覚統合』佐藤剛・土田玲子（バシフィックサブライ）

『絵でわかる一障害児を育てる感覚統合法』坂本龍生（日本文化科学社）

『新・感覚統合法の理論と実際』坂本龍生他（学研）

『子どもの発達と感覚統合』エアーズ（協同医書）

『「五感力」を育てる』斎藤孝+山下柚実（中公新書ラクレ）